

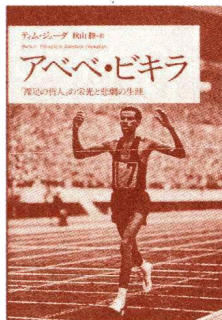
# 本棚 ぶらり

## マラソン

平成27年11月15日(日)さいたま市内を中心としたコースで、さいたま国際マラソンが開催されます。国内外の招待選手も含めた女子エリートランナーが出場する「日本代表チャレンジの部」は、2016年リオデジャネイロオリンピックの女子マラソン代表選考競技会でもあります。そこで、今号ではマラソンに関する本を3冊ご紹介します。

『BORN TO RUN 走るために生まれた ウルトラランナー vs 人類最強の「走る民族」』(クリストファー・マクドゥーガル/著 日本放送出版協会 2010)は、マラソンを愛する著者が抱いたひとつの疑問から始まります。「なぜ僕の脚は走ると痛むのか?」その答えを探すなかで、著者は“世界でもっとも偉大な長距離ランナー”、タラウマラ族に行きつきます。また、ヘルシンキオリンピックの5000m・10000m・マラソンで金メダルを獲得し、史上唯一の長距離三冠を達成したザトペックのエピソードも感動的です。この本を読了すると走らざるにはいられなくなるでしょう。

『アベベ・ビキラ 「裸足の哲人」の栄光と悲劇の生涯』



『アベベ・ビキラ  
「裸足の哲人」の栄光と  
悲劇の生涯』

(ティム・ジューダ/著  
草思社 2011)

(ティム・ジューダ/著 草思社 2011)は、ローマオリンピックと東京オリンピックのマラソンで優勝したアベベの栄光と悲劇を描いた作品です。コーチであるスウェーデン人ニスカネンとの関係を軸にして、生身のアベベに触れています。アベベは、史上初めて、オリンピックのマラソンを連覇しましたが、悲劇的な事故により再起不能の車椅子の人となります。弱点や内面の苦悩を、著者の冷静な筆で浮き彫りにしています。

『マラソンと日本人』(武田薫/著 朝日新聞出版 2014)は、日本人にとってマラソンとは何かを考察しながら、日本のマラソン史を振り返っていきます。東京オリンピックで銅メダルを獲得したのち自死した円谷幸吉、史上最強のランナーと言われる瀬古利彦、公務員ランナー川内優輝など、日本のマラソンを世界へ導くランナーたちは何を想って走るのかを、丁寧な取材を通じて著しています。

深まる秋は読書・スポーツに最適です。冬にはマラソン大会が多く開かれます。今年はマラソンにトライしてみたいかがでしょうか?

大人も楽しめる



## 絵本の世界

第11回



### 『ぼくからみると』

たかぎ じんざぶろう / 文 かたやま けん / 絵  
高木 仁三郎/文 片山 健/絵  
のら書店 (2014)

今回は、どこか妖しげな魔術のような絵本を紡ぎだす、片山健の作品を取り上げます。彼の描く子どもの顔は、画家・岸田劉生の「麗子像」のような「きりっ」とした眉が

印象的で、一目でこの人の作品と分かる大きな特徴となっています。「コッコさん」が登場する絵本(すべて福音館書店刊)のように、内気な子どもの姿を描いた優れた作品が数多くあり、日本を代表する絵本作家の一人です。

妖しげでナンセンス、でも非常に魅力的な作品の代表格が、『どんどん どんどん』(文研出版 1984)、『おなかのすくさんぼ』(福音館書店 1981)、『きつねのテスト』(小沢正/作 ビリケン出版 1980)だとしたら、今回紹介する『ぼくからみると』は、それとは正反対の正統派芸術家・片山健の力量が発揮された作品です。かつて「かがくのとも」の一冊だったこの絵本は、夏の昼すぎのひょうたん池の豊かな自然を、様々な視点から描いた異色作でした。しかし残念ながら当時の製版技術では、油絵で描かれた原画の質感が再現しきれませんでした。

そんな絵本の新版が昨年のら書店から出版され、手に取ってみて本当にビックリしました。新たに描きおろされた装画も見事でしたが、今の技術で製版されたことで、油絵の具の鮮やかな色彩とダイナミックな筆づかいが再現された傑作絵本に生まれ変わっていたからです。定番絵本の新版が出たときは、是非旧版と新版を見比べてみて下さい。うれしい発見が、あなたにもきっとあるはずだから……。